

---

# ガーリック\_キッス

山吹美海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガーリック―キッス

### 【Nコード】

N1389F

### 【作者名】

山吹美海

### 【あらすじ】

私はネットの世界で告白を三回受けている。一度目はおとなしい音大生。二度目はさみしいバツイチ男。三度目は……ほんのいい男って、聞き上手でいかせ上手。女を自分の意志で狂わせ、甘く狂わせる。想っただけで体がうずく。あと、もう一度だけ、もう一度だけ……

1・出逢う前の私（前書き）

ある一つの『愛』の形です。

きれいな表現で書いています。

ヒロオはほとんどありません。

## 1・出逢う前の私

今日もお決まりのデートコース。

彼と海で泳いでそのままいつものホテルへ向かう。

車で30分かかるけど、入り組んだ道を何度も曲がっていきつこのラブホは穴場。

このシーズンのみくる観光客にはわかりづらい場所にある。

だから、私達はいつもここに来る。

シャワーで簡単に砂を落としてきたとはいえ、脱いだ水着には砂が溜まっていた。

海辺で着替えることなくワンピースをはおってきただけの私はなおさら。

よく、水着をひろげてシャワーを浴びてる人がいるけど、そういうのは見ていてかっこ悪い。

所詮着たまま浴びてるのだから完全に落とすことなんて無理。

それなら潔くあきらめてしまった方が気分がいい。

水着のトップスを外すと、ばらばらと灰色の粒が舞い降りてくる。

そのまま家に帰ると家が砂だらけになるから、やっぱりここにくるのが一番。

ふいに私の背中に体温を感じ、大きな手が私の腰を抱いた。

「アキ。」

私を呼ぶ声。

顔を横に向ける私にすばやく唇を重ねてゆく。

腰にあった手はゆっくりと私の体をのぼり、水着で隠れていたふくらみにくる。

私達はお互いの口の中の砂利ごと味わった後、シャワーを浴びる。

今年の夏、地元のコンビニで彼に声を掛けられた。

頭は金色に染めて焼けた肌。

耳ピアスが何個もついたいかにも軽そうな男。

だけど、声がよかった。

心地よい低音で耳触りがよかった。

だから、ついつい話こんでしまい、メルアドを交換した。

そいつは巧みな文術だった。

一晩のやりとりで番号も教えてしまった。

その二日後には逢って、ホテルに行った。

こうして付き合いが始まって一か月がたち、週に2・3度こうしてラブホへ直行する。

彼を好きかどうかはわからない。

彼が私を愛しているとも思えない。

でも、楽しませてくれる。

メールをマメにくれる。

春に別れた公務員の彼よりもバリエーションとテクニックが豊富。

夏を楽しむにはちょうどいい相手だった。

ベットの上でだけは「かわいいよ、アキ」「あいしてるよ」という彼。

私もそのたびに返してあげる。

「私もあいしてるよ」と。

相手の家さえ知らない。

ナンパしてきたコンビニで待ち合わせて、コンビニでさよならする。  
今の世の中、コンビニで男も買えるのだ。

夏が終わりを告げ始めるころ、彼との距離が変わってきた。

メールをしても返事が返ってこないことが増えた。

電話をしても出るのは数回に一度。

別に好きだったわけではない。

でも、いままで相手をしてくれた人にそっぽを向かれると悲しくなる。

週に何度も逢って気持ち良くさせてくれた人がいなくなるのは体の芯からせつなくなるものだ。

私は少しだけ執着して彼に何度も催促のメールをした。

そうしたら、メルアドが届かなくなり、電話もつながらなくなった。

どうでもいい相手だったのに、どうしようもない寂しさが襲ってきた。

だから、私はまた始めた。

出会い系サイトを。

## 恋の遍歴

私には出会い系サイト歴がある。

二年前の彼氏から始まった。

おとなしい音大生と出会い系サイトで知り合って、しばらく付き合っただ。

高卒で就職もせずにフリーターをしていた私には、大学生っていう響きがまぶしくてそれだけで魅力的だった。

時折、大学の授業も見に行った。

でも、彼は私を友達に紹介する時、けして恋人だと言わなかった。

真面目な音大生の彼のプライドを感じた。

そこそこのエリート集団の音大友達に、フリーター上がりのちやらい女を恋人だと恥ずかしくていえなかったんだろう。

しかも出会い系サイトで知り合ったのだから。

逢うたびに求めるものは求めてくるくせに、周囲には隠そうとさえしていた。

そんな不誠実さは行為にも表れていて、ひとりよがりだった。

正直なところ自慰行為の方がよっぽど気持ちよかった。

そのくせ別れ話をしたら、ひどく動揺して私に懇願した。

その様子を見たら、一気に冷めた。

無残な言い方をしたら逆切れしてとうとう本音を出した。

「お前みたいなの、出会い系ぐらいでしか相手にされない」と。

居心地の悪い言葉の残る終わりだった。

やるせなさをいやす相手を懲りずに出会い系で捜した。

選んだのは40代前半のバツイチ。

いつも話を聞いてくれる。

寂しい時は夜中でも飛んできてくれる。

どんな時間にメールをしても大抵すぐに返事を返してくれる。

言うことは何でも聞いてくれる。

おごってくれてプレゼントもくれる。

でも、なんだか、重荷になってきた。

きつと相手は私以上に寂しい人で、精神的に私に寄りかかっている人なんだと思う。

私の方がよいかかりたかった。

だから、別れる選択をした。

音大生とは違い、彼は気持ちよくさよならをしてくれた。

色々苦い経験をしているだけあって、お互いが次に希望を持ち合える良い別れ方をリードしてくれた。

万が一どこかで偶然にあっても、友達のように声をかけ合えるような穏やかなさよならだった。

そんな良い終わり方を経験後私は出会い系を手放すことができた。

縁あって役所の期間の限られた非常勤勤務の職員になれた私は、そこで公務員の彼と出会う。

背が高く、優しそうで、クールな態度は一目みただけで虜になった。

あらゆるつてを使い、同じ職場でもない彼と接点をつくり、彼の視野に入る努力をした。

彼の勤める課に友達を作り、何度も足を運び、確実に地ならしをする。

そして、飲み会にも顔を出せるようになり、告白して見事に付き合えた。

やはり“出会い系ではない出会い”というのは気持ちの持ちようが違う。

おひさまの光に祝福された出会いだっただ。

この地球上で存在するものとして知り合うことに変わりはないのに。

周りの友達に冷やかされ、照れた恋人の表情を見るのは新鮮だった。

恋人の仕事ぶりや、交友関係をじかに感じられるのは幸せだった。

ときに彼を狙うライバルが彼に近づくところを見かけてはらはらしたけど、そんな身近な嫉妬さえも新鮮な刺激になった。

満たされた時間に流されて、平和な時間に慣れてきた。

が、その背後ではコップの中から水があふれ出すかのように静かに異変が起きていた。

彼が春から異動により、本庁から遠い出向機関へ勤務ときまった。

私は迷わず役所を辞めた。

まだ契約期間が半年残っていたが、彼がいないのならここにいる意味がなかったから。

今まで同じ役所でつきあっているという現実が私達をつないでいた。それがどれだけ私達にとって重要だったか思い知らさせる。

彼は、役所勤めをしている以上、非常勤勤務の女の子に下手に手を出して評判を落とすはたくなかったのだ。

そして、周囲の目があるということは、二人を燃え上がらせたり、歩みを慎重にしたり、大事に温めてゆくこともできた。

離れ離れになってしまったら、ふたりのバランスはもろく崩れてゆく。

所詮、男にとっては新しいネクタイの一つ、女にとっては指輪をくれて友達に自慢できる社会的に格好のつく相手。

お互いにそれなりに好意はあったと思うが、些細なすれ違いからけんかになりそれっきり。

ゴールデンウィークまでもたなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1389f/>

---

ガーリック\_キッス

2010年10月15日23時06分発行